
嘘をつかない青年の話

聖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘をつかない青年の話

【コード】

N0315N

【作者名】

聖華

【あらすじ】

ある森の奥には、嘘をつかない青年が住んでいました。

いや、正確に言うのなら、彼のついた嘘はどんなものでも本当になっってしまうのです。

これはそんな彼の身に起こった、『とある嬉しい出来事』から始まる物語です。

皆様も、それが自分にしか分からないことだとしても、嘘のつきすぎにはくれぐれもご注意を。

ある森の奥に、嘘をつかない青年が一人っきりで住んでいました。森の近くには小さな農村がありますから、そこに行けばすぐに一人ぼっちではなくなるでしょう。

でも、青年は昔に村を出て以来、そこに行くことはありませんでした。

青年はそこでは嫌われているからです。

何故なら、青年は『嘘をつかない』からです。

正確に言えば、青年がついた嘘は全部本当になってしまっただけだから皆が皆、青年のことを気味悪がるのです。

そして、その思いを心の内に秘めて、青年に優しげに振舞うのです。青年を怒らせたなら嘘をつかれて、あつという間に殺されてしまっかもしれないからです。

心の優しい青年は自分の気持ちを伝えたくて、叫びたくて、仕方がありませんでした。

「自分はそんなことしない」と。

「ただ、ただ普通に接して欲しいんだ」と。

だけれど、そんな願い事を口に出すことはありませんでした。

それが無理だということぐらい、当然知っていましたから。

自分が普通ではないのは既に分かりきったこと。

普通ではないものを普通に扱う義理など、ないのですから。

そして、それは強要出来るものでもないのですから。

青年はそんな人々の心に、視線に、耐えられなくなって村を出たのでした。

嘘をつけば水やりなど簡単に終わるでしょうが、代償があるのですから、そうするわけにもいきません。

青年は野菜に水を与えながら話しかけました。なんの意味もない話でした。しかし、例え相手が黙っていても、青年にとって生きていくものに話を聞いてもらえるというのは、なんとも嬉しい瞬間でした。後々になると、それがいかに虚しいことか気付くのですが、この時ばかりは自然と顔が綻ぶのです。そして、安堵するのです。

これなら自分が普通になった時、長いこと一人だったせいで話が出来なくなっていた、なんてことにはならないだろう、という考えが青年の中に浮かんでくるからです。『誰かと普通に話せるようになること』そんな絵空事を完全には否定出来なくなることだけが、そんな妄想が気休めにしかならない現実味をおびることだけが、青年の心が完全に折れることを防いでいるようでした。もつとも、折れてしまった方が楽なのかもしれません。

「こんにちは。いいお天気ですね」

そんな青年でしたから、ふいにそんな声をかけられた時には飛び上がりそうになるほど驚きました。あまりに驚いたので、如雨露の水を土がすぐには吸いきれないくらい零してしまいました。

慌てて声の方に振り返ると、そこには明るい茶色の髪の少女が立っていました。その少女は青年の顔を見ると、顔に笑みを浮かべます。まるで、青年に会えて嬉しいとも言つように。

「あの……どこかでお会いしましたか？」

「はい。もつとも、あなたは私のことなんて知らないと思いますが」

笑顔を崩さない少女を見てみると、青年は顔が赤くなりそうな気

がしました。

そして、次に何を言おうか必死に考え始めます。と言つにも、人間に話しかけられたのは本当に久しぶりで、頭の中が完全にこんがらがっていたのです。

「しばらく、ここに居ても構いませんか？」

「えっ、ああ、こんな所でよかつたらどうぞ」

しどろもどろで答える青年に人懐っこく笑ってみせた少女は、青年が道具入れとして使っている箱に腰を下ろします。肩まである綺麗な髪が、柔らかい軌道を描きました。

青年はいつまでも見つめていては不愉快に思うだろうと、慌てて作業に戻ります。野菜の様子を見つつ収穫していると徐々に気持ちも落ち着いてきたので、青年は疑問に思っていたことを尋ねることにしました。

「君は僕が何故ここで暮らしているのか、知っていて来たんですか？」

「もちろんです。私は貴方に会いたくて、ここまで来たんですから」

「ならば、僕がいかに嫌われているかも分かっているでしょう。それなのに、どうして？」

「今は秘密にしておきます。でも、いつかは話せると思いますよ」

少女が楽しげに言うので、青年はそれ以上なんとも言えなくなっ
てしまいます。

しばらく、二人が無言のまま時間は過ぎていきました。さすがに青年もどことなく気まづくなくなってきましたが、何故ここに来たのかすら分からないのでは何を話せばいいものかさっぱり検討がつか
ません。口を開こうとしては閉じての繰り返しです。

ふいに、少女が立ち上がりました。

だから、少女が困ったとしても言うような暗い表情で現れた時には、青年はとても驚きました。そして、すぐに尋ねます。

「どうしたんですか？ そんな浮かない顔をして」

「それが……」

少女が話したことを簡単に纏めると、雇われ仲間の女性が屋敷の主人が大切にしていた壺を割ってしまったということです。今は主人が仕事で出かけているので気付かれてはないのですが、このままでは帰ってきた時どうなるか分からない、と。

それから、頭を深々と下げてこう言ったのです。

「こんなの不躰だと思いますが、お願いです。どうか、私の友達を助けてあげて下さい」

あまりに少女が必死なので、青年は少々肝を潰しました。この少女は自分が幾らでも嘘をつけると思っているのに、こんなに切に頼まれるとは思っても見なかつたのです。もっとも、壺を直すくらいならその代償も高が知れていますから、青年の答えは決まりきっていました。

「顔を上げて下さい。その壺は割れていませんから」

青年は嘘をつきました。もっとも、今ではその嘘は嘘ではなく本当なのですが。

少女は青年の言葉に従います。その顔は、感謝していることを物語っているような笑顔でした。

「ありがとうございます！ これで、私の友達も解雇されなくて済みます。彼女の家も貧しくて、働き口がなくなったらどうしようか

礼だ、と青年は考えたのです。

それからの会話も、パン屋の近くにカラスの巣が出来ただの、それでパン屋の女将さんがカラスを追い出そうと躍起になってるのだと、いつもと同じなんでもないことでした。

ところが、そんなことが次の日もその次の日も続いたので、話は別です。少女の親は病に伏せているのですから、最低限の休み以外は取ろうとしないはずですから。きっと、何か大変なことがあったに違いない、そう青年が考えるのは普通なことでした。

また、青年はこうとも思っていました。もしそれが自分の嘘でどうにかなるのならば、例えどんな代償があろうとも少女を助けたいと。

「あの、単刀直入に聞きたいことがあるのですが」「どうしましたか？」

その後は、しばらく押し問答が続きました。青年は何とか事情を聞こうとするのですが、少女は何でもないと云うばかりなのです。

しかし、数十分の説得の末に少女も折れたようで、ぼつりぼつりと話し始めました。と言うのも、少女が勤める屋敷から売物の宝石がなくなってしまう、主人は疑心暗鬼に陥り、宝石が見つかるまで誰も屋敷に寄せ付けないと雇っていた人間は皆叩き出されてしまったというのです。もっとも紛失した宝石はお得意様に売る物だったのでそれも仕方ないのだと、だから屋敷の主人は悪くないのだと、少女は付け足しました。宝石を買う人は限られていますから、お得意様の機嫌を損ねれば大変なことになるのは簡単に予想できません。

青年は考えた後、こんなことを言いました。

「つまり、その宝石が探してない場所から見つかれば全て解決する

が、今度こそ隠しきれない代償　宝石の代償については何とか誤魔化すことが出来たので、まだ少女は代償に気付いていないのです
が襲ってきそうなのでやめました。それに、この少女にとっては余計なお世話な気もしたのです。

そんな、ある日のことでした。突然、少女がこう言い出したのです。

「私、明日からここに来れないんです」

青年は押し黙ったままでした。正しくは、なんと返したらいいのか分からなかったのです。

自分に会っていることがバレたのか、それとも単に自分のことが嫌になったのか。思い当たるが多すぎて、違う意味でも胸が痛くなりました。

「最初は言わないつもりだったんですけど、やっぱり伝えないといけないと思って……」

「……理由、教えてもらえませんか？」

「……母の病が悪化したんです。今の貯金じゃ、まだまだ薬を買えそうにはなくて……ご主人に無理を言って隣町の仕事を紹介してくれるように頼んだんです。隣町は、ここより裕福だそうですから……これ以上、母が苦しむ姿は見たくありません。少しでも早く、元気にしてあげたいんです」

少女はポツポツと、けれども強い決意が分かるように、理由を話しました。

青年は思わず胸を撫で下ろした自分を恥ずかしく思いながらも、悩み始めます。どのように少女を引き止めたらいいだろうか、と。もちろん、それがただの自分の我侷であることは知っています。そ

れでも少女に会えなくなるということが、たまらなく切なくて悲しくて仕方なかったのです。それに隣町に行つたところで少女が幸せになることが出来る確信はありません。でも、自分の嘘なら。

「でも、隣町に行っている間、君のお母さんの世話は誰がするんですか？」

「それは……」

先の言葉を紡ぐことは、少女には出来なかつたようでした。少女は自分の家が貧しいと言っていましたから、青年にとっては予想通りと言つたところですよ。

「今まで一人だつた僕だから言えることですが、自分が弱つた時ほど誰か他の人に近くに居てもらいたいものなんだと思いますよ。病は気からとも言いますし、やっぱり近くに居てあげた方がいいんじゃないかな、なんて……僕が言えたことじゃないですよ、ごめんなさい」

「謝らないで下さい。私も、それには賛成ですから。だけど、お金が……」

「それなら、僕が貸しますよ」

「えっ……?」

驚きの声を漏らす少女に、青年は嘘をつきます。今まで自給自足の生活を送ってきた青年がお金を持っているはずもないことは、言うまでもないことでした。

「僕、使つてないせいか貯金は有り余ってるんですよ。いつ返しに来てもらつても構いませんから」

お金を貸したところで少女が本当に返しに来るのかなど、実を言

話によれば、少女は青年の所へ通うようになる前に村長の息子から婚約の申し出を受けていたというのです。しかし、少女にはそんな気は全くなく、今まではなんとか撒いて来たのだと。ところが、それに業を煮やした相手が立場を利用し、ついに婚約を認めざる状況に追い詰められてしまった。

「前に、貴方と会ったことがあると言いましたよね？ あの日以来、ずっと貴方のことが気になっていたんです。……最初はきっぱりと諦める為に、貴方に会いに来ました。一度も会話したことはありませんでしたし、それで割り切れると思って」

「だから、あの時は秘密と言ったんですね」

「ええ。ですから、最後にこれだけは言っておきたかったんです」

やっと振り絞った青年の言葉に少女はそう答えると、真剣な眼差しで

「私、今も貴方のことが大好きです。本当は離れたくありません。でも……さようなら」

青年は走り去る少女の背中に声をかけることすら、出来ませんでした。急に告白されたと思ったら、次には相手から振られていたのですから、無理ありません。

それに少し冷静さを取り戻して考えてみても、自分がどう答えればよかったのか分かりませんでした。本心を言えば、少女の意思を尊重する言葉をかけたいところですが、それはあまりに残酷ではありませんか。

やがて、青年は必死に考え始めました。どうすれば少女が幸せになれるのか、ただただそれだけを。実際にはすぐに方法は思いついたのですが、それで少女が幸せになれるのか検討がつかなかったの

顔に笑みを浮かべて考える。他人に向ける為の笑顔ではなく、ただ自分の気分を表す為のものを。ここまで手玉に取れば、後は演技だけでどうとでも転がすことが出来るだろう。実に便利な人間が見つかったものである。

彼女は本気で青年のことが好きなのではなかったのだ。初対面の時はそこそこのいいルックスだと思ったが、今となつては若ハゲの眼帯男である。眼中にもない。利用しきつたら、今からするように処分するだけだ。

この少女は今までも何人も男から金を巻き上げてきたのである。彼女には裕福な街で玉の輿にでも乗り贅沢に暮らしたいという願望があり、その為にはある程度の財産が必要だったのだ。もっとも、さすがに一つの街や村で犯行を繰り返すわけにも行かず、今の村に住み始めたのもここ数年のことであった。

そんな彼女が今回の計画を思いついたのは、新たな収入源を探していたところであったか。それまでは村長の息子に貢がせていたものも、やはり彼では限界というものがあつたのだ。

そこで都合がいい人材を探していたところ、偶然あの青年の話を耳にしたのである。最初は半信半疑であつたものも他にめばしい人物も居なかつたので試しに近づいてみたところ、これが見事に当たりだつたのだからしめたもの。富豪の壺を直したことで謝礼を受け取り、宝石はカラスの巢に行き自分の物にし、貸すという前提の大金も同様に。最後には用済みの人間を、悪い噂が広まる前に処分させたのである。

彼女にとっては言うまでもない程、働いてくれた。もう用はないくらいに。

彼女は大金の一部を使って手に入れた小瓶の中の毒薬を眺めた。相手の売り文句が正確ならば『この毒薬は一瞬で通つた箇所を焼き、

青年が慌てて玄関に立った時、鼻をくすぐるのは吐き気を催すほど強い匂い。

そして、片方の目が捉えた時　青年は力なく膝から崩れ落ち、口に強く手を当てて必死に喉の奥から逆流してくるものと戦いました。喉に痛みが走り、目からは無意識の内に涙が出ます。自分が震えているのが、青年には分かりました。

それでも、この光景を放っておくことは出来ません。なんとか喉を鳴らしながら吐き出したいものを飲み込むと、震える足で立ち上がります。

部屋の中にあつたのは自らの血の中で横たわる、見るも無残な少女の亡骸でした。大きな瞳は恐怖でさらに見開かれ、口からは血を流し、茶色だった髪は血で斑に染まっています。片方の目は何かを入れて掻き回されたのか、目玉があるべき場所には血と透明なものが混ざった液体が溜まっているだけ。喉には刃物で突き刺されたような傷があつて、胸元にも何回も何回も刺されたと思われる痕が残されています。

しかし、なんとと言っても一際目につくのは縦に切られたお腹でしょう。胸から腰辺りにかけて開かれた皮膚の間から見える内臓はこれまた何かで掻き回されたようで、小腸が少しと飛び出ていたり胃が変な場所にあつたりしました。元がどの臓器かは分かる程度に形が崩れている様は、その光景を余計に生々しいものになっています。

青年には分かりました。これが自分の嘘の代償だと言うことが。青年の中で少女は、命をかけても幸せになって欲しいと思える存在だったのですから。そつと触った少女の頬はまだ、ほんの少しだけ暖かく感じました。

「君は生きている。もっとも……僕が関わったことは全て忘れてしまったけど」

自分が何故こんな宝石を持っていたのか、持ち主である少女自身、
全く分からなかったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315n/>

嘘をつかない青年の話

2011年1月25日03時10分発行